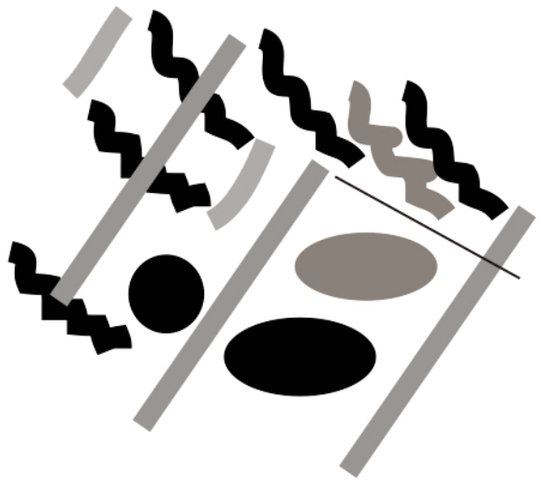
月　刊

Mélange

VOL.76



2012.10.28

詩·エッセイ

攝津幸彦忌・追悼俳句集　其之一

月刊「Mélange」VOL.76

2012／10／28

月刊「Mélange」編集部

「月刊めらんじゅ」76号目次

詩

玉の緒・余滴……野口 裕　03
天竺行……千田草介　04
育ちゆくものたちが……川田あひる　05
朝食後……中嶋康雄　06
秋の一日……にしもとめぐみ　07
茴香……福田知子　08
寺岡良信へのオード……富 哲世　09
黙い足音……大橋愛由等　10
インターヴュー……中堂けいこ　11
降り注ぐG（重力）の音を聞きながら……高谷和幸　12

攝津幸彦忌・追悼俳句集　其之一　14

（10月13日の〈攝津幸彦忌〉に合わせて追悼句を募集しました）

三木蘇州（泉史）／大井恒行／大橋愛由等／岡村知昭／堺谷眞人／白石 守／高山れおな／中村 安伸／野口 裕／藤田踏青／堀本 吟／もてきまり

エッセイ

神戸詞あしび（英国と日本との美の絆）……大橋愛由等　16

◆玉の緒・余滴

野口 裕

変幻自在と行かず
立ったまま血を詠う
声嗄れ喉笛破れ
処刑の上澄みから謳歌される流紋
糞袋、はたまた血の筒に
玲瓏を透かして球体は異常ありとて
父は赦されるだろう　母は癒やされるだろう
戻れ　鳳よ
人見る目もやしなってるやろ
明日は借金貰わなあかん

◆天竺行

千田草介

天竺震旦日本
三国伝来の仏像を見たのだ
世尊の生身を写したというその姿を
みずから歩けなくても東方辺土までやって来られた
おお南無釈迦牟尼仏
ならばその足跡を逆になぞって行けぬはずはない
天竺は鳥のように飛ばねば行けぬところではない
あかあかとかがやく月へは渡って行けぬが
このふるさとの海は天竺へとつづいている
浜辺でひとすくい手に取った水に
恒河の流れの一滴があらぬといえようか
春日明神
乞い願わくば
渡天なさしめたまえ

◆育ちゆくものたちが

川田あひる

木片が
散乱し
一本
いっぽんと
篠竹を
束ねるように
揃え
育ちゆくものたちが
静まる
棚に
高々と
据える
卵を
割る
卵黄だけが
要るのだ
いくつ割っても
どろり
白身にまみれ

卵黄は
取り出せない
二度と
取り出せないのか
しっ
静かに
棚を広幅のテープで
とめてゆくひとがいる
育ちゆくものたちの基盤を
確かに
構築してゆくもの
しっ
静かに
床に充満する木屑を
吸いこむわたしを
しっ
静かに
テープを貼りつづけるものには
未来が
見えている
狭い
いや、
がらんどうのような
場所に
育ちゆくものたちがいるのに
育ちゆく
気配のさなかで

割れ卵の
白と
黄が
混ざった
落下の
空中停止
しっ
静かに
育ちゆくものたちはいる
育ちゆくものたちがいる
こころ　しずめて
祈りの棚に
割れ卵をならべてゆく
日が昇るまで
わたしは
原寸の漲る卵黄を
巻き戻し
抱卵の
虹を
負う

◆朝食後

中嶋康雄

どぶに落ちたアブラゼミがジージーと喚きもがいている
トイレットペーパーが空から雨のように静かに降り
喚きの旋律に酔ってダンスしている
白に絡めとられる足の群れ
吸い尽くされるぼくたちはアリのように無力で無口だ

外耳が荒れている
汁が内耳に垂れようとする
ただの表面張力が内耳に棲むアリを守る
内耳は女王アリのお気に入りのインテリアに飾られている
テントウムシの死体
アゲハチョウの羽
シロスジカミキリムシの複眼群

ぼくたちは怒っている
ほんとうは怒っている
我慢していると
怒りはアイスクリームのようにとけて
それが怒りなのかなんなのか分からない

無力な朝を
よろよろと通勤する
電車は常に廃線を取沙汰され
行く先に会社があるかどうかも
もうわからない

トイレットペーパーがぼくたちに絡まり着き
首を静かに絞め続ける
街頭に広がった柔紙の雲海の波間
縊死した者たちが浮かび上がり
笑いかける

◆秋の一日

にしもとめぐみ

植物園の芝生では
植木市をしていた
姫りんごやオリーブや
秋の草花が並んでいる中
焼き栗を売っていた
ひとつ　ふたつ
父に焼き栗を渡す
父が栗をはむ
歯が何本か欠けてしまっている
渋皮をこそげながら父が栗をはむ
もさもさとした栗の実を
ゆっくりと味わっている父
あごや口の周りにできる深い皺
食べている父の姿を見ていると
私がどんどん小さくなって　父に栗をむいてもらう
父が栗をはむ　私も栗をはむ　甘さが広がる

二人で最明寺川を上り　祠のある滝まで歩いた
果物を供えて　お参りをしている家族に出会う
せせらぎの音ばかりがする
銅鑼を鳴らしてお参りをした
私は父のことを　家族のことを祈った
父は何を祈っているのだろう
最明寺川をまた下り
父を中山のホームまで送る坂道
アルツハイマーの父は自宅のある家に帰ると
何回も言い出す
それをうながしながら
父のいるホームへ帰る上り坂を黙って歩いた
何か話そうと思うのだけど
適当な会話が思いあたらない
父の足に靴が合っているか歩きやすいか？
そんなことをぽつりと問いかけながら歩いた

坂道の途中でホームから迎えの車が来た
父を乗せて車が登っていった

◆茴香

福田知子

擦り切れそうな時間
……であった
繊維だけで繋がっている
いとのように

にんげんの
こわれゆく

透けていく神経
植物の繊維を漉くごとく

伐り裂きながらすすむ斜面の向こう…に

か
の
地　が　あるはずだ

その昔
プロメテウスが茴香の髄に詰めて人類のもとに走
った

からから　まわる　まわす　原初の　火

火の眼

ひらひら　さそう　さゆる

火の唇

四肢に絡まる
まばゆい体温をあつめて焦がす　原初の　火
にんげんたちに齎された
はじめての　火

聲を発し
火を求めるひとびとが
聲をたよりに伝ってゆく

花ひらき　黄金の傘
火の花は　ひらき　ひろがり　燃え
ひとづてに　ひろがり　燃え

すこしずつ　すこしずつ
あまやかな香りにさそわれ
いつのまにか　燃えつき
凝る火

眼も
も聲も火に焼かれ

さよなら……さえ……告げるまもなく
あとからみんな　わすれゆく
わすれさる
わすれさられる

眼も

唇も

聲も

千手のすべてに神経をはりめぐらせ
あらゆる手段で細い茎をつかみ
気がつくと　ひとびとは　皆
はげしく火を追っている
烈しい渇きを伐り裂きながら

あ
の
髄までもう一度……　と

しかし　あなたは知っていた
日々　残酷な刑罰が与えられることを
それでも　とどけたい　あしたのあること
ささやかに手渡したい茴香のこと　を

◆寺岡良信へのオード

富　哲世

きみのからだの元気な部分と
ぼくのまだなんとか大丈夫なところをつなぎ合わせて
一体の人造人間をこしらえたら

彼は愉快で
隠れ上手な
一人前のじかんを
当たり前につづけていけるかもしれないね
首から上はその日の気分で
好きな方と取り替えたりして
みんなを驚かしたり
笑わせたりしてね

きみの誠意と
ぼくの愛とを
一粒の宝石のような

漁師の貧しいすなどりへの永遠のアコガレで
混ぜ合わすことができれば
ぼくらはきっと尽きない悔いや
鏡の前のうしろめたさを
こぼれる砂のように許し合うことができるだろう

たとえ時代が
ぼくらをおきざりにして
見慣れぬあしたへふたりを連れ出したとしても
この今だけは
いつもと変わらぬぼくらの今なのだから

迷いの呪文に身をゆだねたまま
急な階段をのぼり
ドアをひらいて
アユラやマキさんの迎えてくれる
見えない鬼も住まっている
いつものあの店へ
きっと行こう

◆インターヴュー

中堂けいこ

河原におりていくと人々がたむろしていて、そのうちの一人がわたしをふりかえり群れにはいるようにうながしている。　わたしはうれしくなって人々の中にはいるのだが、人々はひとところの水面を一心に見ながら手をにぎりしめ胸にかまえ、ときおり何か声をだしている。わたしを群れにうながした人が声をだし皆はそれにしたがう。するとわたしはそのなかでもっとも高い音をだしているようで、人々はふぅぅと聞こえないくらいの息を吸う。わたしは音を合わせることができなくてなるべく声を出さないでおこうとする。

河原からは対岸がのぞめそこでも人々が集まって水面を見つめている。見つめられる水は常に川下へ流れ動いているのだが、ここでは視点をうごかさないようにするらしかった。そうするとある時いっせいにわたしたちは川上に移動している。これは視線の動体慣性ではないかとおもうのだが、リアルワールドではないので、だれも口にすることなく川上にむかって皆が移動していく。流水の速度と正確に同じに、わたしたちは一つのかたまりになれるのだ。一つのかたまりは移動（錯覚）しながら新しい声（ニュースピーク）を発していく。何を言っているのかわからないのだが、うっとりと聴き惚れてしまう。対岸の人々もまた一つのかたまりのようになっている。わたしは心地よいので見えたことは見なかったことにしようとする。正しいことの基準は常に流れて単純な新しいことばを発する人は崇められたり蔑まれたりするのだが、常に一つのかたまりになってわたしたちは流れていくようだ。

◆黝い足音

大橋愛由等

みだりに費やした六日間では菩提樹の文様が描かれたテーブルクロスの上に置かれた六客の黝（くろ）いティーカップは誰がいつどこの窯で造ったのかをめぐって諍いを繰り広げたのだけれどかつて住んでいた公団住宅では母が季節ごとに家具の位置替えをしていたので少年と猫が寝そべる場所がそのたびに替ってしまったこともあって六客の悶着（クッセ・ジュ）は発生しなかったのだ

うごめくシチリア蛸が描かれた陶板をアップライトのピアノの上に飾る季節には必ず黝（あおぐろ）い足音を立てながら蟲浄土から小男がやってきて「この欧州時間二七時という時間は蛸が蛸壺を目指す時間であるかどうかを巡って六カ月思念してきた」と陶板下のソファにいつのまに座わって語り出し「蛸が蛸壺に入るのは海流の不具合による形而上学的悶着（アポリア）に絶望するためである」と続けるのであった

少しずつ動く小闇に黝（しりぞ）けられたぼくは立て続けに咳をしたあとに海岸べりに幽と立つひとびととあの夏の更地街へ還ってきたひとびとの名札を用意するために饒舌をいましめポートワインを六日間断酒して朝獲りの小鳥の首なんぞ見向きもせず〈殺風剤〉なるものを二度噴射させ文机に向かい一心に名札を用意するのだが悶着（ニクトフォビア）を克服できないままに迎えた朝餉でスクランブルエッグを二口で食べてしまうのである

いつまでも誘人灯がちろちろ灯っている無言街であいかわらず演技を続けている風と鳥と蟲たちに二度目の冬の台本を届けようと天末線を超えてやってきたぼくは誤って偽書を持参したことが分かったのできっと彼らはぼくを黥首（げいしゅ）の刑にするだろうと怯えながら歩き進めると黠（わるがしこ）い小闇がやってきて今日のティータイムに六客のカップが揃わなければおまえの行き果ての定まらぬ巫病（もんちゃく）は決して解決しないだろうと繰り返ししゃべるのである

◆降り注ぐG〈重力〉の音を聞きながら

さようなら、若草に根を忘れた柳たち。

高谷和幸

・庭ですから、日差しで濯う日にはどこかで「干物のお葬式」だってあるんですから、生類の生垣をこえて、屋根の上にほいと跳び乗ったりして、ねぇ、何の映画だったか、ファースト・シーンで鳥が飛んでいたよね、手が届きそうにない、あの空のように、庭になるのですわたし、胸の内には日章旗だってかくれてるんですから。

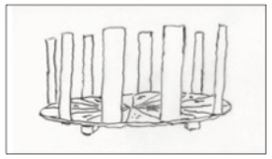
・太らせておいて、まだこのうえお褒めの言葉をいただけるのですか。ああ、あなたの少年を孕みたい。

……久しぶりのお出かけです。……

・日除けのために、石灰を水で溶いたものをガラスに塗って、それから父親は温室から出ていった。

……まだこのあたりが海だった頃のお話です。　兄弟による糞と粘土の奇妙ながまんくらべがありました。がまんくらべの結果はよく分からないもので終わりますが、「糞がはねかえる」と「粘土をなげだす」というキーワードが穢れと赦免の重力レンズになって預かりものの庭にひかりを偏向させ、まとわせる。鉱物のかけら・落ちた花弁のひとつが湛える静謐な時間（さようなら、古代人たち）が交わしているあいさつ。……

・庭で生息する生き物たちと、金属のへら、鳥の羽根でできた刷毛が転がっている。垂木の根元に塗られたクレオソート油（防腐剤）をたっぷりと吸い込んでしまったので、朝からものぐさをきめこむ。



図／アルベルト・ジャコメッティが書いたエクリチュールの不思議な装置。円周にたてられた衝立には異なった事象が書かれている。彼は円盤の中心から時間を超えて自由にそれぞれの衝立に行くことができた。

……古書肆「風羅堂」のお手伝いの一日だった。たつの市のYさんの書庫に古書の梱包と買い取りに出かけた。床から天井まである書棚が両壁に並び、真ん中を背中合わせの棚が蛍光灯の光の届かない奥へと続いている。どこからか植物の気配がしてくる。あれはアルド・ロッシ（建築家）が好んだ棕櫚の木だろうか。自伝のための記録媒体を外皮に何層にもまといながら埃じみたまばたきを投げかけてくる。それはわたしを庭に迷い込ませて、消え入るような気分にさせる。……

・ここには記憶をどこかに消してしまおうとするもの、忘却を詰め込む空箱が棚のあちらこちらに散らかっている。

・帰る時になってYさんが本を呉れた。その一冊は岩波文庫で、その本を所有した二人の名前が書かれた「蕪村俳句集」（昭和三十二年第十七刷）だった。毛筆で書かれた、一年一組。和子。鉛筆書きの二年C組。美代子。どちらから、どのようにこの本は贈与されたのか？　「子」という横一文字に移るまでの跳ね字が二人に共通した癖があるように思える。知らず知らずに机の決まった場所に置く筆記具（自分の分身）が意味を持ちだすような字だった。それは、二階の薄暗い部屋で過ごす一人の時間を連想させた。いつ始まって、いつ終わるのかかいもく見当がつかないでいる空間に、窓から漏れる弱い陽射しが身体の半分を手元に置いている。

・禁城春色暁蒼々の発句。
青柳や我大君の艸か木か
（――我大君――）の注釈に紀友雄、〈草も木もわが大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき〉とある）

・段ボールの箱につめられているのは、わたしと死んだわたしだ。きっと、あなたは段ボールの外側だけが見えるのだから、「今のわたし」は使い古した手ぬぐいのような手触りがしているのかしら。

・禁城春色暁蒼々の三句。
若草に根を忘れたる柳かな

・毛筆でこの句の頭に○印（一年一組の和子さんの筆跡である）がついている。萌える若草と柳の根を忘れてしまった「生命」の勢いの違いが意識に上ってくる。彼女はなぜこの句を選んだのだろうか。明確なことはわかりようもないが、和子さんから二年C組の美代子さんに伝えられた何かがここにあり、それが時間を超えてわたしにも与えられる。「忘れる」という土の層。地中の深いところにあって、艸も木も根を下ろすところに「鬼」がうまれる。「庭」が人知れず涙を流している。

・庭の一角の宙空から、光がふきこぼれる。

・恰悧なカメラ・アイを持つ頭足類が身に着けてきたもの、危険からすばやく体をかわして収束する動き。それは庭が見せる大昔からの動きだった。

・秘密について。雨水が叩いたわたしからメルカプタンのにおいがする。顔の裏側にある大きな空洞にことばがわだかまっている。

・遠く離れる。自分の残してきた半身を定着させるために、自分に向かっての歩み。さようなら。

・わたしの庭は全体になろうとして失敗するのです。

・一方で、「完璧な庭」を受けとる。毎日を漂流物が打ち上げられる波打ち際に立っているのかもしれない。空へ遡行しようとする渚。漂着した日用品から可笑しな忠誠心と不死が顔をのぞかせている、そこから。

・温室に入るのを疎んじていた母が、サボテンの竜神木とか、乳母玉とか、白仙翁の並んだ棚の前に立っている写真がある。春の植え替えを手伝ったのだろう。白っぽい園芸用の服装をしている。あれから、認知症のあなたから忘れられてしまったが、あの時の葉群れの影にわたしがいたのだろうか。よどんだ空気。乱反射する乳白色のひかりが母の内部を充たしていた。

・原始の海に浮かんだ、母の庭。

・ひかりが差し込まない庭がありました。もう動かない母の庭。ここでは「干物のお葬式」だってあるんですから、正常な装置ならば、庭と時計はいつまでも動いてくれなくちゃね。思い込みでもなく、あるいは本当にそうなってしまったのか。もしも、「停止した庭」があちらこちらにあるとすれば、それがスキャンした最後の青空がとてもきれいだと思ってしまう。

・さようなら。若草に根を忘れた柳たち。

・（生きていると）

・人間の顔は似てくる。
……掻き毟る痛点。見えない皮下組織というか、届かないもの。ただ、やってくるのを待ち続けること。……

・黒人の女児の幽霊が見えるのは、炙婆と孫の男の子だけだった。炬燵のコードがもつれるように時間錯誤した二人は、殺したり殺されたり。

・見知らぬ庭先に立っていた。

・「ひかりのたまういて、いくつもながれていくたまを、あれはあなたとはちがうものだとかんじ、どこかの垣根のむこうにある庭ともちがうもので、そのあいだにあって、木や草よりもあたたかい血がながれていて、なんだかなつかしくおもわれ、あれはわたしからいくつもうまれるのではないだろうか？」と思う。

攝津幸彦忌（10月13日）追悼俳句集 其之一

10月13日は、俳人・攝津幸彦(1947-1996)の命日です。

先日(9月8日)に、神戸文学館で、攝津に関するシンポジウム「1970・80年代俳句ニューウェイブ〈攝津幸彦〉を読む」を開催した余勢を借りて、さらに攝津の作品世界を2010年代に読みなおし、再設定する試みの一環として、なにか攝津忌の日にあわせてしてみたいと考えたのです。そこで堀本吟さんに提案したのは、みんな俳人なのだから「忌日を詠む」のは俳句のひとつの確立したジャンルなので、少人数で良いから、攝津幸彦忌への俳句を募り、各人が俳句を作ったり、投句する間にも、攝津のことを考えてほしいとの思いを伝えたのでした。

吟さんは私の提案を受けて、「豈」同人を中心とした何人かに声をかけていただき、以下のように合計12名の参加がありました。

この試みは、あと二年続ける予定です。三年続けたあとに、簡単な小冊子にする予定です。

大橋愛由等

攝津幸彦追悼句……五十順

▼三木蘇州（泉 史）

手が茎　音のなく　食べてみる　足が茎
風が　樹液のにがさが　両腿のあいだ
底のない迷路が　臭気かすか　首の上がタワー

▼大井恒行

ダリヤよりあわれをいまに幸彦忌

▼大橋愛由等

八朔の海女の口伝はよだれ味
栞あり出雲に向かう者の物
タマシヒを尼僧にきざむ幸彦忌

▼岡村知昭

雲呑や娘婿ひのまるを支持
穂芒はワンタンメンを頼るなり
雲呑をことりこ啜り青丹よし

▼堺谷眞人

明月や鳴尾出土の照準器
表三の原稿とどく十三夜
買切を決めかねてゐる衣被
秋の虹一ツ橋から音羽まで
炬燵にてねまる姿や甲山

▼白石守

我が業は煉瓦砕いても治らない
なぜ生きるすすきの穂先は曲がってる
こおろぎは過剰生産せず鳴いている
天の川大げさすぎる我が選択

▼高山れおな

仮面
談林
孤雲
放吟
秋ゆきひこ

▼中村安伸

稲妻を研げばこぼるゝキリル文字
ゆく秋の壜はこはれて川となり
いもうとを嵌めて仕上ぐる鳩時計

▼野口裕

傘こそ瘡と係り結びの夜に触れる
トーストの波非常口交響詩
無可有郷笙篳篥の揮発材
河童から駱駝に至る針の山
まれに見るふわとろ伴奏蝋涙項

▼藤田踏青

早瀬に佇つ後ろ姿もKGボーイ
十六年のかくれんぼうやあゝ背後より
日本しずかなしずかに仮のあはれ

▼堀本吟

羽たたむ羽折る鶴のまだ四角
攝津忌の美空もふかき複葉機
永劫にひつぎをはこぶ渡り鳥
模造紙には手練の血の幾すじ
大輪田のとどのつまりの禁句かな

▼もてきまり

昼の部のパンドラの匣幸彦忌
賽銭を投げ花鳥風月ちんちろりん
あらあなた毒気があつて曼珠沙華

神戸詞（うた）あしび

65-2012.10　大橋愛由等

英国と日本との美の絆

大阪なんばの高島屋で開催されているバーナード・リーチ展を観に行ってきた（10月21日）。

私は、大学生の頃から読書を通じて、一九三〇年に始められた民藝運動に影響を受けてきた。「用の美」に表象される生活哲学が私の気質に合ったのである。この影響は、今にいたるまで私の生き方の基軸になっている。華厳思想で言えば〈事事無礙法界〉への覚醒となろうか。

リーチも作陶した大分県の小鹿田（おんだ）焼の里へは二度訪問している。一回は学生時代。大分出身の友人の実家に遊びに行った時に寄ったものである。友人は民藝運動も小鹿田（おんだ）焼も知らなかった。続いて数年後、父母らと共に九州旅行した時にも訪れている。そのたびごとに、あの特徴ある刷毛目模様の陶器を購入してきたが、その殆どは阪神・淡路大震災の際に割れてしまった。

展覧会を観賞したことで、書棚にあったバーナード・リーチリーチ著『東と西を超えて―自伝的回想』（日本経済新聞社）を読み返してみた。彼がそれまで日本の中では「下（げ）戸物」といった評価しか与えられていなかった民衆の中で流通していた陶芸作品を、作陶家・濱田庄司、富本憲吉、思想家・柳宗悦らの出会いによって評価するようになったのは知っていたが、同じ地平で日本の陶器製造の現状を憂いていたのである。

「日本の陶芸の水準は、主に西洋との接触を通じて落ちてしまった。また、全体の風潮が西洋の手法や理想に向かっていることも甚だ明白である」。一九七四年に書かれたこの文章は「芸術と工芸の間に画然たる境界線は何もなかった」日本の陶芸の本来あるべき姿を希求するがゆえに民藝への評価につながっていったことを確認できるのである。こうした危機意識があってこそ民藝作品への評価を高めていったのだろう（ところが、リーチが当時評価した民藝の担い手は、名も無き工人たちの地道な集団工作営為であったはずだが、最近では「民藝作家」と名乗る作家たちが多く出現するようになっている）。

★

当日展示されていた作品の中で私が気に入った作品は、「黒釉花瓶」。リーチの作陶が完成の域に達した一九六五年頃に作られている。彼は英国のコーンウォール州にあるセント・アイヴスに工房を構え、浜田の協力を得て、日本式の登り窯を作り、そこで多くの作品を生み出している。リーチは日本や中国の陶芸に影響されていたばかりではなくて、英国にもともとあったスリップ・ウェアといった素朴な焼き物を復活させたり、欧州各地のいわば「民藝作品」を掘り起こしており、欧米の作陶家たちにも影響を与えている。

リーチはこう語っている。「富本、浜田、そして私にとって、陶芸とは、われわれがそれぞれの国民的な背景からのみならず、世界の反対側からも伝統を受け継いだ芸術家として、また工芸家として、現代の表現における真実を探し求めるための天職だったわけです」（同掲書）

私は作陶家ではないが、「用の美」にこめられている生活哲学は、身近に接している日々の暮らしの中にこそ、審美眼の対象となるべき、コトとモノが遍満しているのだという気付きを、覚醒してくれたのが、この民藝運動なのである。こうした二〇歳代に共感した思想の標準値ゆえに、私の陶器の好みは、清水焼や萩焼といった薄手の華奢が香ってきそうな系統ではなく、ゴツゴツとして肉厚で重量感があり日々の暮らしの中で使い込むことによって愛着が増してくる陶器のしなじななのである。

バーナード・リーチ作
蛸絵大皿

詩と評論
月刊『Mélange』VOL.76
めらんじゅ

2012年10月28日　通巻76号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集人／大橋愛由等〈『Melange』同人〉
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円（税込）